

福島第一原発の今

汚染廃棄物行き場なく

東京電力福島第一原発（福島県大熊町、双葉町）で発生が続く高濃度の放射性物質を含む汚染水は、処理や貯蔵の過程で汚染廃棄物を生み出している。本紙取材班は二日、原発構内に入り、その保管現場を回った。東電や政府は二〇一三年春にも、汚染水を浄化処理した後の水を海洋放出する計画だが、大量の放射性廃棄物の後始末は先送りされたままだ。（小野次健太）

東日本大震災 11年

濃縮廃液

「どうやって処分していくか、正直に言っても具体策はない」。1〜4号機西側にある広大なタンクエリアの一角で、東電の広報担当者は苦しそう

な表情で言った。眼前に、コンクリートの壁に囲まれた屋根付きの小屋。壁のすき間から横長の水色のタンクが見えた。持参の線量計はタンクエリアで毎時〇・五放射前後を示していたが、小屋近くで同四放射には上がった。厚さ二十センチほどのコンクリート越しに強烈な放射線を放っているタンクの中身は、事故直後に発生した「濃縮廃液」。津波の影響で塩分を含んだ高濃度汚染水を淡水化し、原子炉の冷却に再利用する過程で出た廃液の沈殿物だ。

「濃縮廃液が二百立方メートル、その上澄み水が九千トン。汚染水処理が安定し、これ以上は増えない。東電は三年度から試験的な処理を始める計画だが、手法の検証すら始まっている」。

地下貯水池

小屋の北側に、土葺きのようになり上がった更地がある。一三年前に汚染水の漏えい事故を起した地下貯水池が埋まっている場所だ。

当時、汚染水の貯蔵は網膜りだった。古い込まれた東電は、電線の真下でタンクが造れない場所に穴を掘って遮水シートをかぶせ、主に放射性ストロンチウムが残る汚染水計約二万四千トンを入れた。しかし、地中に漏れて使えなくな

った。汚染水の抜き取りは終わったが、池の中に補強材として入れたプラスチック部材が激

しく汚染されて残る。池の上に立つと、線量計の表示はあっとい間に毎時二放射に。広報担当者は「浄化処理した水を入れていけば除去もできたと願うが、汚染水を入れてしまったのでなかなか手をつげられない」と首を落とす。

海洋放出が計画されている処理水は、多核種除去設備（ALPS）で浄化した水だ。その処理過程でも泥状の廃棄物が発生し、HICと呼ばれるポリエチレン製の容器（直径一・五メートル、高さ一・八メートル、厚さ約一センチ）に入れて保管している。

敷地南側の保管場所では、コンクリート壁の内側にHICの上部が見えた。高濃度汚泥が入ったHICは一部が既に耐用年数を超え、二三年度末にその数が八十七基になる。劣化によって破れる恐れがあり、新しい容器への差し替えを迫られている。だが作業時の被ばく防護策を講ずるのに時間がかかり、汚染が激しい容器の入れ替えは二月二十二日に始まったばかりだ。

処理水の海洋放出が始まれば、約千基ある保管タンクは徐々に減る。ただ汚染水の発生をゼロにする計画はなく、浄化処理は続く。その間、処理で出る廃棄物はたまり続けるため、長期的な管理方法の検討を先送りすることは許されない。

濃縮廃液
事故から2年半後まで増加。高濃度に汚染された泥状の沈殿物は容量100トンのタンク3基で貯蔵し、上澄み水を別の場所で保管

地下貯水池
深さ5〜6メートルの貯水池を7カ所造り、4カ所に汚染水を投入。3カ所で水漏れ事故が起きた。未使用の1カ所だけ撤去

HIC(汚泥保管容器)
直径1.5メートル、高さ1.8メートル、厚さ1センチ。3日時点で3955基が発生し、置き場容量の94%が埋まっている

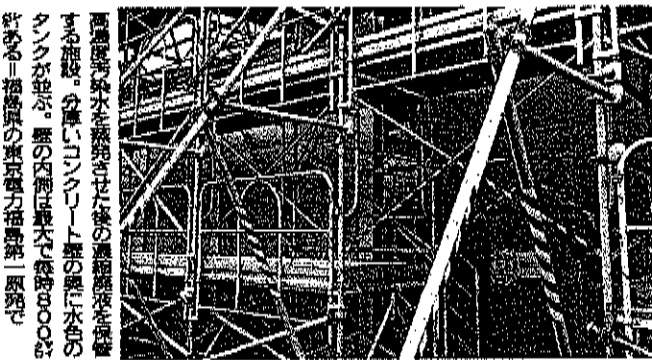
沈殿物は極めて高い放射線を放ち、上澄み水は高い塩分濃度

既存設備で処理できず

プラスチック部材が高濃度に汚染

高濃度で劣化し破れる恐れ。新しい容器に移し替える作業は、被ばく防護策が難航

移し替え作業進まず



高濃度汚染水を蒸発させた後の濃縮廃液を保管する施設。分離したコンクリート壁の間に水色のタンクが並ぶ。壁の内側は最大で毎時800放射に達する。福島県の東京電力福島第一原発で

高線量の泥、東電「具体策ない」